



# 富来川

## 伝統ある粗朶漁発祥の地

清水 徳克

聞き手・前田貴子 梶原千聖（石川県立羽咋高等学校1年）

### 自己紹介

名前は清水徳克といいます。昭和22年3月19日生まれで、現在65歳です。出身地は志賀町であり、旧富来町の稗造地区の戸数20戸程の小さな集落に住んでいます。

この稗造地区というのは、富来川の源流が集落間を流れ、農林業で生計をたてていた山間地区で、粗朶漁発祥の元となる富来川に沿って、細長く14集落が点在する地区です。昔は人もたくさんいましたから、学校も稗造第一小中学校、稗造第二小中学校と2校ありました。しかし、現在は2校とも廃校され、富来地区へ一本化されています。私は、稗造第一校下の小中学校、そして、中学校2年2学期から統合された富来中学校、そして富来高校へと進み、その後は農家の長男であったので、地元就職し、現在に至っています。

里山の名人ということで取材にいられたわけですが、「名人」と称される程の者ではありません。ただ「粗朶漁」をするうえで、他の人より多くの鮎を捕まえるから、誰かがはやしたものだと思います。これは、経験がうまくさせたのでしよう。私は、小学校の時から親父に連れられて、父の職場同僚と一緒に参加し、捕まえるコツを覚えたわけです。

### 鮎

鮎という魚は「一年魚」といって、約1年で生涯を終えます。10月～11月に小石まじりの流域で卵が孵化し、河口近くで育ちます。そして、4月ごろから5月にかけて上流の方へ上がっていきます。そして、10月の中頃まで、石についた苔を食べて大きく成長します。ですから、良質の苔が無かつ

たら、鮎は大きくなりません。濁水状態になったり、大雨等で土砂流が発生すると、苔が付かなくなり、鮎の成長に害が及びます。その年その年によって、気象状態が変わりますので困っています。地鮎（富来川で生まれた魚）も年度によって違いますので、毎年、鮎の稚魚を琵琶湖の方から購入して放流しています。富来川には全体で地鮎と放流鮎と合わせて約5万匹以上いると思います。

鮎は高級魚に属し、金沢の方からも釣り人が毎年来ています。鮎の食べごろは、9月～10月頃になって、子持ちになったものが一番うまいと思いますよ。私は、鮎はほとんど食べないので知りませんが、通の人は、骨や内臓と一緒に食べるそうですよ。

### 粗朶漁

笹竹を左右から合わせ、直径約30cm程の束にし、カキ縄で縛ります。そして、縄を隠すように葉のたくさんある小さな笹を差し込みます。そうすることによって、鮎が隠れようと粗朶の中へ入ってくる仕組みです。その粗朶を4組（4人分）送ります。1番粗朶、2番粗朶、3番粗朶、4番粗朶を割り当てし、川下から入ります。鮎は人間が近づくと上の方へ逃げようとします。それを1番粗朶の人が走って行って逃げるのを止めます。1番粗朶に遅れないように、2、3、4番粗朶が順次囲みます。鮎は隠れようとして粗朶の中に入るわけ、それを手づかみで鮎を捕る漁法が粗朶漁といいます。

この粗朶漁の欠点はいっぱいありますね。水量が多いとだめ。水が濁ると魚が見えないからだめ。寒いとだめ等、難しい漁法です。又、2時間が限度で、体力を消耗することや、粗朶の葉が擦れて落ちてしまい、鮎が入ってこなくなるこ

ですね。

## 粗朶漁をとりまく環境

今から6~7年前までは、川の水が生活用水で汚染されつつあったが、合併浄化槽の普及で清流に戻りつつあるね。

私が子供の頃の富来川は、きれいな水が流れ、洗濯物や野菜を洗っていたりしたものや。川にはいろんな魚がいたよ。

最近、清流が蘇ったのか、サケやマスがよく遡上してくるよ。又、清流しかいないゴリやヤマメが増えてきてるね。

今、一番行政に伝えたいのは、富来川の流域に川の水を農業用水にする為、せき止め箇所が3ヶ所あることだね。いずれも魚道が無く、上流へ上ってこれない魚類がいっぱいいることだね。陳情もしているが、予算の関係で難しいものがあるね。里山の文化遺産として「粗朶漁」をアピールする時には、魚道の改修が最課題だと思うね。

我々は、「富来川粗朶漁保存会」という組織を立ち上げ、年に2回程粗朶漁を実施していますよ。メンバー（10人）は60歳以上の方ばかりなので、川の中を「粗朶」を持って駆け走るのは限界がありそうだね。

若い者に伝承しようと呼びかけているが、天候と時間帯が

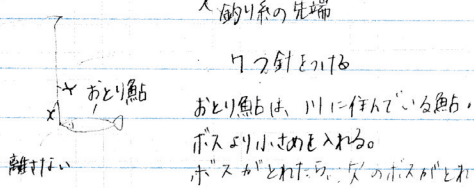
合わないの、なかなかうまくいきませんね。でも、「村おこし」的に観光客の体験イベントを結び付けたいので、頑張って伝承していきたいと思うね。2年前に外国人（8人）と星稜大学生が民宿して「粗朶漁」を体験した時は、皆の喜ぶ顔を見て、してよかったと思ったし、バーベキュー等でコミュニケーションを取り楽しんだ時は、一生忘れないでしょうね。

## 粗朶漁以外の鮎の捕り方

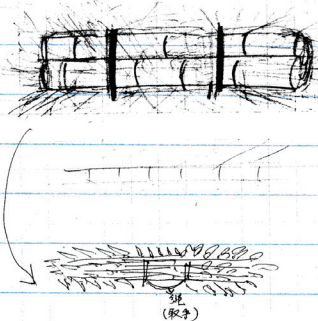
一般的には鮎を取る方法としては、友釣り、毛針釣り、巻き網、ヤナ漁があるよ。でも、この粗朶漁の捕り方は、世界中探してもないと思うね。だから、世界遺産に登録されるかもしれないよ。もし登録されたら、こんなうれしいことはないね。「地域おこし」の起爆剤のなるし、観光資源として位置づけし、関連産業が生まれるんじゃないかな。

友釣りについて説明すると、鮎は縄張り意識が強い魚であり、その習性を利用した漁法だといえる。まず、群れで縄張りを守っている流域へおとり鮎の尻に針を付け、縄張りの流域に入ると、リーダー格の鮎が追い出そうとして追い回してくる。その鮎が針に引っ掛かり、釣り上げる方法が友釣り。だから、友釣りは大きな鮎ばかり釣ることができる漁法な

### 〈友釣り〉一般的鮎取り方法

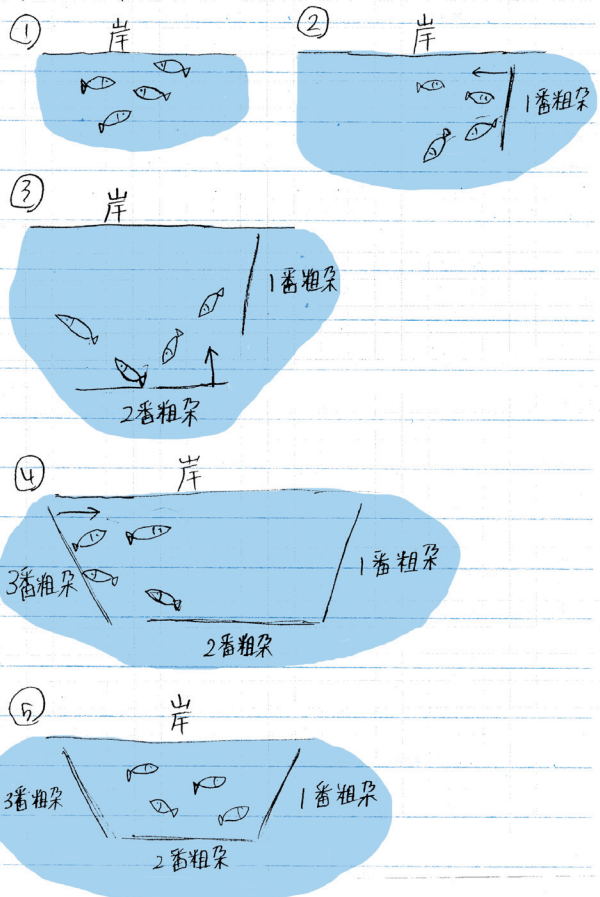


### 〈粗朶漁で使う竹〉



縄で、竹をまとめる。  
長さ約2m  
束の直径30cm  
約15本の竹を使う。

### 〈粗朶漁〉



んです。

## イベント

子供会等が親子で体験学習の一環として、「粗朶漁」をして遊んだことが何回かあったね。子供たちは「粗朶」の中に手を入れ、「おった、おった」と騒ぎ立てるが、誰も捕まえることが出来なかったね。でも、真剣に捕まえようとしたのが、満足そうな顔をしていたね。終えた後、その鮎を川の中瀬で串焼きし食べさせたら喜んでいたね。毎年、申込みがあるが、天候のせいでお流れになっている現状だね。

## グリーンツーリズム

私もグリーンツーリズムのNPO法人に加入している。昨年、隣の集落で「のとキリシマツツジ」を観光をメインとして、農家民宿を開業した「粗朶漁」のメンバーがいる。この農家民宿も「粗朶漁」の体験をアピールして、お客の勧誘を企んでいるよ。こんな山間の地域だからこそ出来ることがいっぱいあると思うよ。自然の環境を生かして、森林浴の依頼、山菜採り、薬草採り、きのこ採り等の体験、又、川遊び、村祭りの参加等、都会の人が喜ぶ題材がたくさんあると思うよ。

このようなことを生かした体験型観光を、この稗造地域に根付かせようと思っています。又、高齢化が進み、空家が増えだしました。これらの相続人と農地付きで賃借契約し、都会の人を呼び込もうと考えていますよ。

## PROFILE

### 清水 徳克 しみず のりかつ

昭和22年3月19日生・農業

消防吏員として35年間勤務し、平成19年3月に羽咋郡市消防本部警防課長を最後に退職する。その後、平成19年から平成22年まで、志賀原子力発電所化学消防隊長を務める。兼業農家として農林業に従事する(昭和47年～現在)。30歳頃から地域に伝わる粗朶漁のリーダーとして、むらおこし活動に取り組む。



## ● 取材を終えての感想 ●

このインタビューをする時、私は不安でした。いままで在籍している新聞部関連で、インタビューをしたことはあったけれど、その時は顧問の先生がいました。しかしこのインタビューは、顧問の先生はいないし、2回目のインタビューは、なんとアポまで自分達で名人に電話してとらなければならないという、とても難しい内容。相手は全く話した事のない大人。しかし、清水名人は、とても温かく迎えてくれました。しかも奥さんがコーヒーなどを出してくれて、それも美味しくいただいて、インタビューはとても和やかなものになりました。また、1回目のインタビューも2回目のインタビューも、かなり何回もいろいろなミスをしてしまい、そのたびに頭が真っ白になった私達に清水名人はとても優しくしてくれました。インタビューの内容はとても興味深いものでしたが、最初はこういったことがよくわからないこともありました。他にも、1回目のインタビューの時にわかったつもりになったことを後になってICレコーダーで聞いてみると、わからないところもあり、2回目のインタビューの存在を痛感したりもしました。インタビューをして、私は改めて能登の伝統が失われていっていることを知りました。でも、こうやって里山里海の行事があって、これからは失われるのではなく、取り戻していけたらいいなあと思いました。(前田貴子 写真:右)

取材の時期が冬で、粗朶漁を目の当たりに出来る時期と違っていたので、残念でした。名人からは、詳しく、笹の編み方や粗朶漁のやり方などを口頭で教えてくれていただきましたが、頭の中だけで想像するのは、正直、至難の業でした。しかし、名人が図で丁寧に教えてくれたので、とても助かりました。

普段、耳にしている方言も、ICレコーダーを通して、いざ聞き直してみると、上手く聞き取れなかったり、取材した内容をまとめるのはとても大変でした。まとめるのに、とても時間がかかってしまい、名人には、随分とご迷惑をかけてしまいました。

どれも初めての経験だったので、戸惑う場面が何度かありましたが、無事にレポートを完成させることが出来てよかったです。(梶原千聖 写真:左)